＼ はなもす2020巻頭特集 ／

多摩区×オリンピック・パラリンピック

英国代表チームが中原区の等々力陸上競技場で事前キャンプ（2020年7月～9月）を行うなど、川崎市も多様なプロジェクトに取り組んできた東京オリンピック・パラリンピック。この機会に、多摩区にゆかりのある金メダリストや日本代表をサポートするコーチ、次大会で活躍が期待される選手をまとめて紹介しちゃいます！！！

パラ5大会で15の金メダル

成田 真由美（なりた まゆみ）さん

多摩区在住

アトランタ・シドニー・アテネ・北京のパラリンピック4大会に連続出場し、金15・銀3・銅2の計20個のメダルを獲得。「パラリンピックを盛り上げたい」その一心で、2015年に7年ぶりの現役復帰を果たし、リオデジャネイロ大会でアジア・日本新記録を更新した。国内外の大会に出場する一方、東京2020組織委員会では『理事で唯一のパラリンピアン』として活動を続けてきた。

心地いい多摩区「応援うれしい」

生まれ育った多摩区は「病気をする前もした後も、変わらず受け入れてくれるまち」。地元の子どもたちやお花屋さん、八百屋さん、駐輪場の管理人さんと「いってきます」「今日はどこいくの？」と気軽に声をかけ合う。「歩いていたころも、車いすになってからも温かく迎え入れてくれる」。昔も今も、そんな心地よさがある。

中学生のとき脊髄炎を発症後、下半身まひに。運動を再開して23歳のころ水泳を始め、大会に出るたびに記録を更新するなど躍進するも、追突事故に遭い両手にまひが残った。それでもあきらめず競泳を続け、パラリンピックのアトランタ大会へ。自由形をはじめ各種目でメダルを取り続けた。2008年・北京大会後に一度は第一線から身を引く。

2013年、招致委員会の一員としてアルゼンチン・ブエノスアイレスで東京開催決定に立ち会い、東京2020組織委員会では理事としていろいろなことを決めていった。「選手に戻り、泳ぐことで『パラリンピック』を盛り上げたい」。意を決し、７年のブランクを乗り越えて競技復帰すると、次々に国内大会を制覇。リオデジャネイロ大会出場権を獲得し、不屈の復活を遂げた。

「東京2020がゴールだと思っていない」。海外の選手や家族、仲間たちに「また日本に来たい」と思ってもらえる、2024年にも続くようなまちづくりを思い描く。「生まれも育ちも多摩区でたくさんの人に応援してもらい、地域で生活できていて育ててもらっている。これからもずっと多摩区民として、応援してもらいたいし、区内が障害のある人や高齢者にとってさらに住みやすいまちにしていきたい」

多摩区×成田さん

西生田の洋菓子店「モンタナ」

成田さんが好きな
ケーキ「ダミエ」

「ここの甘い匂いは子どものころからずっと慣れ親しんでいる。今もモンタナの匂いは変わらない」。成田さんが長年通う、昔ながらのケーキとお茶が楽しめる洋菓子店。売り場奥の喫茶スペースは段差もなく広々。車いすでも入店できる。ゆっくり友人と語り合うのも、一人で過ごすのもいい。

【モンタナ】
◆西生田3-9-22 ／☎044-966-0324
◆9:00～20:00 ／◆火曜、第3月曜

水泳をとおして、腕だけでもこうやってみんなと一緒に泳げるということを知ってもらいたい。どんな世代でも誰でもできる、すごくいい競技に出会えたと思っています。

Profile

1970年多摩区生まれ・在住。横浜サクラスイミングスクール（青葉区）所属。川崎市民文化大使を９期務める。市民栄誉賞、市スポーツ賞など受賞。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事。

パラスノーボードチーム コーチ

金子 敦（かねこ あつし）さん
（菅獅子舞保存会 会長）

Profile

1961年生まれ、菅馬場在住。東菅小学校と中野島中学校、百合丘高校出身。地元で建築業を営む。特定非営利活動法人日本障害者スキー連盟所属のコーチ。

2018年冬季・平昌大会の2年前からパラスノーボードチームのコーチに就任。「テクニカルよりはマネジメント。選手が世界で活躍することが第一」と、体調管理や食事など選手の生活全般を支える。ドクターや義足技師ら11人のスタッフと9人の強化選手が一丸となり、2022年・北京大会を目指す。

多摩区×金子さん

菅の獅子舞 後継者を育成

会長として指導する
金子さん（右）

菅で800年以上続く伝統芸能。17歳のとき、3頭の獅子を先導する天狗役に任命され、およそ40年にわたって関わり続ける。2019年、菅獅子舞保存会の会長に。20代の現役世代を指導しつつ、小学校の授業に出向いて文化を継承する。

好きなこと、夢をあきらめない

高校時代からサーフィンに明け暮れ、25歳のころスノーボードに出会った。全日本スノーボード選手権で3度表彰台に立ち、同競技が初めて五輪に導入された長野大会の選考会にも出場。指導者としても活躍する中、2014年、思いがけない事故で右脚が人工関節に。「全て失ったと思った」。そんなとき、パラコーチとして声がかかり、障害を物ともせず世界で戦う選手達に触れた。「彼らはポジティブに、夢を全くあきらめていない。できることをやればいいと気づいた」と、好きな競技に携わる一つの形を見出す。「胸を張って。コーチとして任されているプライドがある」。次代へ想いを託す。

2018ユースオリンピック２冠

河合 来夢（かわい らむ）さん
（県立百合丘高校 出身）

Profile

2001年生まれ、横浜市青葉区在住。県立百合丘高校出身。5歳からブレークダンスを始め、ヒップホップも経験。2018年に川崎市スポーツ特別賞を受賞。

ダンサーネームは「Ram」。ブエノスアイレスで行われた2018年夏季ユースオリンピック（15～18歳）に出場した河合さんは、新種目の「ブレイキン」（ブレークダンス）の女子個人と男女・国混合で2冠に輝いた。2024年パリオリンピックでは、ブレイキンが五輪初実施の正式種目に暫定決定。4年後のパリ大会での活躍に期待がかかる。

多摩区×Ramさん

「全力」高校生活、文武両道で

県立百合丘高校

河合さんが2017年春から通った南生田の高校。好きだった科目は数学や体育で、体育委員も務めていた。

ブレイキンで「楽しさ届けたい」

川崎駅そばのスタジオに5歳から通い、中3のとき、溝口生まれのチーム「フローリアーズ」育成部門の1期生に。異例の早さで高1から正式メンバー入り。同年、史上初の世界大会3連覇を仲間と果たした。2018年のユース五輪では、大会前に右肩を亜脱臼していたにもかかわらず、「楽しむのがモットー」と自分を貫き、女子個人に加え、男子12位のベトナム人とのペアで挑んだ混合団体でも王座を獲得。新種目のブレイキンで初代女王に輝いた。

多摩区にキャンパスのある専修、明治大学でも練習を重ねる河合さん。「見る人がハッピーになれるように笑顔で楽しく踊りたい」

めざせ！やさしさ日本代表！
かわさきパラムーブメント

かわさきパラムーブメント

～誰もが自分らしく暮らし、自己実現を目指せる地域づくり～

川崎市では、東京2020大会の開催を契機に、「人々の意識や社会環境のバリアを取り除き、誰もが社会参加できる環境を創り出す」ことを理念とした「かわさきパラムーブメント」を推進しています！

★パサージュ・たま事業

障害に関する理解と関心を深めるため、多摩区役所では月1回程度、区内の障害者団体や作業所等が集まり、活動紹介や相談、自主製品の展示・販売などを行っています。

パサージュ・たま　検索

多摩区総合庁舎 1 階アトリウム▼